

にしち ひがしち  
西地・東地遺跡

所在地	北設楽郡設楽町大名倉字西地、東地 (北緯35度6分41秒 東経137度32分37秒)
調査理由	設楽ダム
調査期間	平成26年5月～平成27年1月
調査面積	4,220㎡
担当者	鈴木正貴・川添和暁



調査地点(1/2.5万「田口」)

**調査の経過** 調査は、国土交通省中部地方整備局による設楽ダム工事関連事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会より委託を受けて、平成26年5月から平成27年1月にかけて実施した。調査面積は4,220㎡で、14A区・14B区・14C区の三調査区に分けて調査を行った。

**立地と環境** 遺跡は標高約450m、寒狭川左岸の山麓緩傾斜地および河岸段丘面上に立地する。当地は大名倉地区の北西端にあたり、寒狭川で開析された谷地形が開け始める地点に位置する。寒狭川の対岸側には、昭和43(1968)年、早稲田大学の調査により縄文時代後期の遺物が多く出土した、大名倉遺跡が位置する。

**調査の概要** 調査区東側にあたる14A区は、調査区外の北側から広がる谷地形中に位置する。表土下には、谷地形を埋める土石流堆積物が4m以上と厚く堆積しており、その上面で近世の埋葬遺構を2基検出した。谷地形脇の山側傾斜地には、近世以降のピット列が確認された。

**14B区東側** 調査区西側にあたる14B区は、北側から山側斜面が張り出す地点を境に、東側と西側とで様相が異なった。14A区で確認された谷地形は14B区東側まで続いており、山側傾斜地にはピット列を確認した。また、谷地形の落ち際には、近世の埋葬遺構が3基見つかり、キセル・火打石・寛永通宝とともに埋葬人骨が残存していた。

**14B区西側** 14B区西側では、縄文時代と近世前半以前の遺構・遺物が良好な状態で確認された。基本層序は、I層：近現代の盛土(最大厚1m程度)、II層：黒褐色粘土質シルト(近世前半以前：最大厚40cm程度)、III層：褐灰色粘土質シルトおよび粘性の強い黒色粘土質シルト(縄文：最大厚40cm程度)、IV層：花こう岩礫の多い黒褐色あるいは黒色粘土質シルト(地山か)、V層：黄褐色粘土質シルトおよび砂層(地山)である。

近世前半以前の遺構には、炉跡5基、竪穴状遺構2基以上、掘立柱建物などに関連するピット跡多数がある。炉跡および竪穴状遺構内および周辺では、鉄滓が出土するほか、被熱により著しく赤色化した台石(金床石か)や磨面の著しく発達した磨石(砥石?)も出土した。当地で野鍛冶などが行われた可能性も考えられる。その他、石積みの一部も確認した。

縄文時代の遺構は、II層直下およびIII層中、あるいはIV層・V層の直上で確認できた。検出された遺構には竪穴建物跡5棟、袋状土坑5基以上、単独の土器埋設遺構2基、その他土坑・ピット多数がある。これらの時期は縄文時代中期後半から後期初頭に属する。

調査区北西端の緩斜面に堆積する黒色粘土層中からは、縄文時代中期後半の竪穴建物跡が3棟確認された(1304SI・1305SI・1306SI)。いずれも石組内側で一辺約40cm四方の石囲炉跡が見つかり、1304SIおよび1305SIの炉跡内には大型土器片が敷かれていた。支柱穴および堀方も、一部ではあるが辛うじて検出できており、このことからいずれも一辺5m程度の隅丸方形のプランであったと推定される。

調査区南端で見つかった竪穴建物跡1263SIは、径4m程度の円形あるいは隅丸方形状を呈する。柱穴跡は壁柱を中心に見つかっており、中央には土器敷炉跡がある。竪穴建物跡の堀方南西端には、土器埋設遺構(埋甕)が1基確認された。この埋甕は後期初頭の深鉢が正位に埋設されたもので、口縁部上に蓋石が置かれ、底部には小穿孔が施されていた。

竪穴建物跡1201SIは、径5m程度の円形または隅丸方形状を呈する。この建物跡中央から北西寄りには、0.5×1mの範囲で長方形の石組があり、中央に土器敷炉跡があるとともに、南東脇には入子状で立位に設けられた深鉢が、北西端には大きな台石が据えられていた。台石と入子状の深鉢を含め、石組全体で一炉跡の機能を有していたと考えられる。

袋状土坑は、14B区西側中央付近に集中して認められた。これらは植物質食料の貯蔵穴であったことが考えられ、1208SKでは、埋土中に堅果類種実由来の炭化物粒がわずかに残存していた。036SKでは、土坑内に多量の後期初頭土器片および磨製石斧を包含しており、貯蔵穴としての利用後に廃棄あるいは埋納行為が行われたようである。

その他、単独の土器埋設遺構を2基検出した(1078SK・1286SK)。いずれも立位埋設で、底部は未穿孔で残存していた。1078SKは胴部下半のみが辛うじて残存している状態で時期は不詳である。一方、口縁部まで残存している1286SKは後期後葉に属する。

**出土遺物** 14B区の出土遺物には、縄文土器・石器、弥生時代の条痕文土器、灰釉陶器、中世および近世陶器(山茶碗・古瀬戸・天目茶碗・内耳鍋)や砥石が出土した。縄文土器は、中期後葉から後期前葉までが主体ではあるが、早期押形文(高山寺式)が最も古く、早期後半・前期後半・中期中葉(北屋敷式)なども若干出土した。石器では、石鏃・石匙・スクレイパー・打製石斧・磨製石斧・打欠石錘・切目石錘・有溝石錘・磨石敲石類・石皿台石類の出土をみた。剥片石器では黒曜石の使用が目立ち、剥片や法量の大きな石核の出土もあった。

**14C区** 14C区は調査区南西端にあたる。調査区東半分には幅広の谷状地形が伸びており、その埋土中に縄文時代および近世の遺物が包含されていた。縄文土器や石鏃・剥片などの石器のほか、大型石棒や滑車形耳飾片が出土した。

**まとめ** 今回の調査により、縄文時代中期後半から後期初頭頃の集落景観を描ける調査結果が得られた意義は非常に高い。設楽町域では、これまで縄文時代の遺物は多量に採集されてきたものの、当時の活動痕跡(場)を広く確認することができていなかった。単に調査事例の多い西三河地域との比較材料になるのみならず、今後行われる設楽ダム工事関連事業の調査事例とも併せて、豊川最上流域の様相を解明する基礎資料として、広く活用されるものになるであろう。(川添和暁)

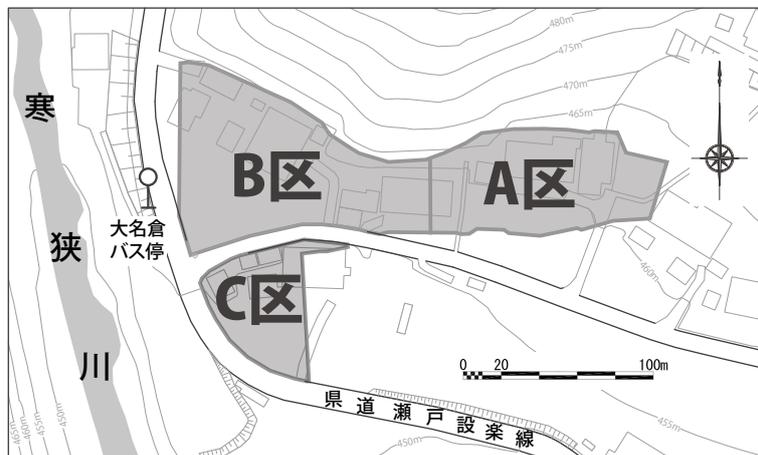


図1 調査区位置図(1:4,000)



図2 14B区縄文時代遺構位置図 (1:300、マス目は10m)



14B区1面目と14C区黒色土検出状況 (南より)



14B区811SL 炉跡検出状況 (北東より)



14B区341SZ 埋葬人骨検出状況 (南東より)



14B区036SK 土層断面状況 (南より)



14B区 1304SI (南西より)



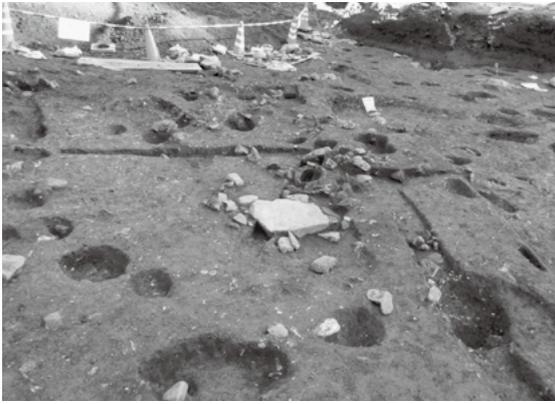
14B区 1304SI 石囲炉跡 (北より)



14B区 1305SI (南東より)



14B区 1305SI 石囲炉跡 (南より)



14B区 1201SI (北西より)



14B区 1201SI 長方形石組炉跡 (南より)



14B区 1263SI (南西より)



14B区 1263SI 内埋甕 (南より)